

アートも建築も、風土の^{ひだ}襷から生え上がる

軽井沢の風土は、多くの文人墨客を輩出し、一方では多くの美術館を抱えて古今東西の芸術作品の宝庫ともなっています。

また 2005 年の大賀ホールの開館以来、世界の音楽ファンの注目を集め、新軽井沢エリアを中心に、文化の熱気が沸き上がっています。

一方で近代の諸芸術はアート、非アートの境界が曖昧になるなか不安定でダイナミックな感動の揺らぎが起きており、文化や芸術の高エネルギー反応のつぼとしての軽井沢から発する創造性と感動は、新しいスタイルのおもてなしでもあります。

こうした文明的な流れに沿って新しい芸術・文化祭を提起したり日本の古典芸術との接点を探るなどして、軽井沢モダンを象徴する企画も魅力的です。

このような展望に立つとき、この地区は軽井沢物語の始まりに相応しい玄関口“ステーションフロント”として思いきった転換が望めます。

軽井沢駅前から矢ヶ崎公園に至る一帯は、高原性の緑の大地の中に個性的な軽井沢モダンの建築、橋、道、そして樹木までもが響き合い、全体が国際会議場の立地にふさわしいアートガーデンになるように提案しました。アートも建築も道もそれぞれの固い殻から解放されて風土に融け込みます。そのようなランドスケープのなかに数多くの美術館への誘いとなる、ゲートミュージアムを配置してはどうでしょう。



ステーションフロントの創出 ①

軽井沢駅の北口デッキに立つと、目の前には高原保養地を象徴する大きな芝生広場が広がり、店舗やミュージアムの入った建築群の先には、矢ヶ崎公園の水面や大賀ホールまでも望むことができる、そんな軽井沢固有のステーションフロントを創出します。



駅前通りの発展 ②

軽井沢駅前の通りに旧軽井沢まで続くLRTを導入します。随所に乗降場があるので気ままに散歩しながら、都合に応じてLRTに乗車できます。沿道の建物も、時間をかけながら軽井沢の玄関口らしい構えに設えていきます。



生まれ変わる矢ヶ崎公園 ③



公園内の池を柔らかな形に整え、水路を引き込み、ボードデッキ、棧橋、そして国際会議場を添えることで、多種多様な活動を誘発します。まちなかで浅間山を仰ぎながら楽しむ飲食や、浅瀬での水遊び、水辺に映える会議の風景など、軽井沢の風土性を凝縮した活気ある公園へと生まれ変わります。